

# 第6回ひょうご福祉の現場 若手リーダー賞

## 受賞者3人決まる

兵庫県内の福祉施設などで働く若手職員を励まそうと、公益財団法人神戸新聞厚生事業団(高梨柳太郎理事長)が創設した「ひょうご福祉の現場 若手リーダー賞」の第6回(令和7年度)の受賞者3人が決まった。施設利用者や地域の福祉増進のため、個性を發揮し、創意工夫や努力を惜しまない3人を紹介する。

◇ 井上陽介さん(44) いたつの市は、社会福祉法人あいむ(姫路市)が運営する児童養護施設「アメリティホーム光都学園」(たつの市新宮町光都1)の施設長。

松下みどりさん(42) 西宮市は、社会福祉法人兵庫県共同募金会(神戸市中央区坂口通2)の事務局主任。共同募金活動の運営に携わり、広報・啓発活動にも力を注ぐ。

仁頃哲太郎さん(49) 神戸市中央区は、社会福祉法人三田谷治療教育院(芦屋市)が運営する多機能型事業所「ワークホームつつじ」(西宮市郷免町)の施設長。

賞は神戸新聞厚生事業団が、令和2(2020)年に創設。神戸新聞社、兵庫県、神戸市、兵庫県社会福祉協議会、神戸市社会福祉協議会が後援し、県内の福祉や障害者など12団体からも協力を得た。

選考会は8月下旬に神戸新聞社で開かれた。書類選考を通過した4人(他薦4人)のうち3人が参加。自己PRの後、仕事への情熱やリーダーとしての自覚などを選考委員7人が丁寧に聞き取り、全員を選んだ。

表彰式は後日あり、神戸新聞厚生事業団より表彰状、賞金20万円、記念品が贈られる。

### 「ひょうご福祉の現場 若手リーダー賞」選考委員 =敬称略、◎は委員長

- ◎谷村誠 (兵庫県社会福祉法人経営者協議会会長)
- ▽大和三重 (関西学院大学名誉教授) ▽石川雅重 (兵庫県福祉部地域福祉課長)
- ▽山添昭仁 (神戸市福祉局 暮らし支援課長) ▽杉田健治 (兵庫県社会福祉協議会事務局次長兼企画部長)
- ▽森貞拓郎 (神戸市社会福祉協議会福祉部長) ▽山中英夫 (神戸新聞厚生事業団専務理事)

講評

改革精神、長期的視点、信頼感の逸材ぞろい

井上さんは、2年ぶりの挑戦で受賞を果たした。大学卒業後に姫路市の社会福祉法人に入り、二つの児童養護施設でキャリアアップ。第三者評価者の視点で、法人や施設だけでなく兵庫県の社会的養育拠点で働く施設職員のレベルアップや離職防止にも寄与した。取り巻く環境や時代を見据え、生き残りをかけて、変化

を恐れずに進む改革者だ。松下さんは、兵庫独自のマスコットづくりに携わり、「赤い羽根の共同募金」のイメージアップに貢献した。共同募金は地域福祉の貴重な財源。兵庫県は近畿ナンバーワンで全国7位の募金額を誇る。各市町の社会福祉協議会、自治会など

子高齢化やコロナ禍など時代とともに減少傾向にある。貴重な正規職員3人のトップである松下さんは、特に若い世代へのPRや啓発に力を入れた。子育ての視点も生かし、日々の多忙な業務に埋没せずに中長期を見据える。

障害者の就業移行や生活介護を支援する「ワークホームつつじ」では支援員、副主任支援員、主任支援員、副施設長、施設長と順調に昇進。コミュニケーションを重視する謙虚な姿勢に信頼が寄せられ、法人全体の研修の責任者でもある。今年是他薦4人、最終3人の選考となったが、逸材ぞろい。全会一致で受賞者にふさわしいと認めた。

(選考委員長・谷村誠)

社会福祉法人あいむ  
児童養護施設アメリティホーム光都学園(たつの市)

施設長 井上陽介さん(44)

施設で暮らす子どもたちから「先生」と呼ばれて慕われる井上陽介さん一たつの市新宮町光都1



虐待を受けるなどして施設で暮らす5〜18歳の子どもら25人の養育と自立支援を担う。「子どもたちは播磨科学公園都市の緑豊かな自然に囲まれ、伸び伸びと生活している」と柔らかな表情で語る。大学を卒業した2005年から児童養護施設の指導員を務め、今年で20年。指導員になったのは学生のころ、神戸の児童館でアルバイトをした際、子どもと接した体

験がきっかけだった。現在の施設には09年から勤務。指導員について「その時々で事情に合わせて、父親や兄、友達と役割を変えながら、子どもと接しなければならぬところが難しい」と語る。昨年、施設長に抜擢された。子どもの自立の観点から、生活用品などの備蓄をやめてホーム費(生活費など)を新設。子どもが指導員らと相談しながら必要な生

活用品をそろえるようにした。子どもたちが日々成長していく姿を見ると、何よりうれしい。卒園生とは交流サイト(SNS)を通じて園内行事の参加を呼びかけ、絆を強める。「卒園生は30歳を超える年齢になってきた。子どもたちの自立とともに、卒園生が施設を実家のように思い、帰ってきてもらえるようにすることが大きな目標です」

(西尾和高)

社会福祉法人兵庫県共同募金会(神戸市中央区)

事務局主任 松下みどりさん(42)

募金への協力を呼びかける松下みどりさん=神戸市中央区坂口通2



子ども食堂や障害者の活動への支援、被災地への義援金。市民の寄付をさまざまなニーズに生かす「共同募金」の役割は幅広い。「支援する人の思いを支えるのが仕事の魅力です」と力を込める。北海道で生まれ、大学卒業まで宮崎県で過ごした。中学2年の時、身体障害がある叔父の学習塾に手伝いに行くと、社会福祉士の男性と楽しそうに語っていた。

叔父を特別扱いすることなく、相談に乗る男性の姿にあこがれた。社会福祉士の資格を取得し、大学の恩師の縁で兵庫県へ。2008年、「赤い羽根」と「歳末たすけあい」の募金活動に取り組み、共同募金会に就職した。活動の現場で寄付を呼びかけるのは中高年ばかりで「若者に募金の意義や役割が伝わっていない」と感じた。若い世代に親しみを持

ってもらおうと、マスコット「あかはねちゃん」を作った。17〜19年には、各市町の共同募金委員会の委員と学習会を開き、漫画のチラシや活動を紹介するかるたの作成といった取り組みを共有。サッカーJリーグの神戸などスポーツチームとの連携も進める。「困ったときに助け合えるつながりを日常の中で少しずつ広げていきたい」

(長沢伸一)

助け合いのつながり広げたい

社会福祉法人三田谷治療教育院  
多機能型事業所ワークホームつつじ(西宮市)

施設長 仁頃哲太郎さん(49)

法人全体の職員の研修責任者も務める仁頃哲太郎さん=西宮市郷免町



働きたい知的障害者らを支援する。利用者に清掃などの作業を提供し、社会への参加を促すため、職員12人と一緒に働く。福祉の専門学校を卒業後、三田谷治療教育院で働き始め、生活介護と就労移行支援の「ワークホームつつじ」で2021年4月、施設長に就任した。それまでは利用者の作業を補助する器具「治具」作りなど、主に

現場で利用者向き合ってきた。施設長になり、保護者と接する機会が増え「利用者だけでなく、保護者も笑顔にしたいいけないことに気付いた」。映像やチラシを使って、利用者が楽しそうに施設で過ごしている様子を積極的に発信。そうすることで、心配する保護者と信頼関係を深めるようになってきた。

採用。ミャンマー人の20代女性で、当初は懸念もあったが、利用者の名前をすぐに覚えるなど、やる気やパワフルさに周囲も影響を受け、現場は活気ついた。来年ももう一人、配属予定だ。福祉の仕事は「感情労働」と言われ、リフレッシュ時間が大切なため、業務改善にも取り組む。「職員が愛着を持てる職場にしていきたい」

(堀内達成)

利用者と家族、笑顔になる職場